
小さな犬

桃山マサル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな犬

【Nコード】

N2504J

【作者名】

桃山マサル

【あらすじ】

小さな犬の小さな話。

小さな犬がいた。

住宅街の一角にうずくまり、その犬はたまに眠り、たまに近くの住民から餌を貰い、たまにじつと通行人たちに目を向けていた。

何をするでもない。誰かに飼われているわけでもない。小さな犬は、ただそこにいた。

ある日、小さな犬が眠りから覚めると、目の前に人間が立っていた。

「あ、起きた」

十代半ばの女の子だった。長い黒髪が肩にかかっている。手には学生鞆を持っており、糊の利いたパリつとした制服を着ていた。

「あんた本当にちっちゃいね」

女の子はしゃがみこみ、小さな犬の頭を撫でた。寝ている間に乱れた毛並みを、一定の方向に梳いていく。小さな犬は抵抗することなく、女の子にされるがままにされていた。

「変な犬。少しは怖がればいいのに」

そう言って微笑んだ女の子の顔を、小さな犬は小さな瞳で見上げていた。

「ねえ、家に来ない？」

女の子は首を傾げた。

「こんなところで寝てないでさ、家においでよ。今はないけど、犬小屋だつてつくるよ。雨の日にも濡れないですむよ。あんた汚れて真っ黒じゃない。それにちゃんと餌もあげるし、散歩もするよ」

小さな犬はじつと女の子を見上げている。

女の子は両腕で膝を抱えた。

「ねえ」

女の子の大きな瞳に涙が滲み、目尻から溢れ出した。

「家に来てよ」

小さな犬はわずかに口を開け、か細い声でくうんと鳴いた。女の子は制服のスカートに顔をうずめ、嗚咽を漏らした。通行人たちの怪訝な視線が一人と一匹に注がれている。

それから二日ほどして、再び同じ女の子が小さな犬のもとにやってきた。

「こんにちは」

女の子はやはり制服を着ており、手には鞆を提げていた。

「今日はご飯を持ってきたよ」

女の子は鞆を開け、中から薄切りハムのパックを取り出した。ビールを破り、小さな犬の前にハムを置いた。

小さな犬はふんふんと鼻を鳴らして臭いを嗅いだあと、小さな口でハムをくわえた。口に入れてはこぼしてを繰り返しながら、不器用にハムを食べていく。

「おいしい？」

女の子は残りのハムを全部小さな犬の前に置き、プラスチックの容器を鞆の中にしまった。

「じゃあ、今日は用事があるから。またね」

そう言って女の子はひらひらと手を振り、早足で道を歩いていった。

小さな犬はハムを食べ終わった後、ふと顔を上げ、女の子が去って行った方向を見つめた。当然そこに女の子の姿はない。

それでも小さな犬は、しばらくその方向を見続けていた。

それから三日が経ち、うとうとと昼寝をしていた小さな犬は、不意に目を覚ました。目の前に誰かが立っているわけでもない。小さな犬は道の向こうをじっと見た。

すると道の向こうから、あの女の子が歩いてきた。女の子の横には、女の子と同じくらいの年齢の男の子がいた。

小さな犬の小さな瞳に映る二人は、とても仲が良さそうに見えた。女の子は幸せそうに微笑み、男の子は気恥ずかしそうにはにかんでいた。

二人はゆっくりと小さな犬に近づいて、そして何事もなく通り過ぎた。

小さな犬は女の子の背中を見つめた。二人が道の角を曲がるまで見続けた。

結局、女の子が小さな犬に目を向けることはなかった。

それから小さな犬は、いつものように過ごしていた。たまに眠り、たまに食事を貰い、たまにじっと通行人を眺めた。そして一日に一回は、道の向こうを見つめた。

半年が過ぎても、小さな犬は小さな犬のままだった。

雪の降る日だった。

ふわふわとした粉雪が、鉛色の空から町全体に降り注いでいた。

家々の屋根に、道路に、通行人の傘の上に、小さな犬の頭と背中の上に。

小さな犬は凍えていた。猫のように身体を丸め、粉雪にも負けてしまいそうなかすかな白い吐息を、小さな鼻から吐き出していた。

制服の上にダッフルコートを着たあの女の子が、道の向こうから駆けてきた。小さな犬はぴくりと小さな耳を動かしたが、寒くて顔を上げることができなかった。足音だけが小さな犬の前を通り過ぎ、やがて消えていった。

夕方になり、やがて夜になっても、雪は止まなかった。

住宅街は静かだった。雪が降り積もる音以外は、何も聞こえない。小さな犬は眠ろうとしていた。頭と背中に積もった雪が、心地よい毛布のように感じられた。

夜が更けるにつれて、雪の勢いは増してきていた。

しゃり、と深く積もった雪を踏みしめる音が聞こえた。女の子が

小さな犬の方向へと歩いてきていた。外灯が照らす女の子の横顔は悲しげで、頬には涙の凍りついた跡があった

女の子は小さな犬の前で立ち止まった。

「……生きてる？」

女の子はいつかのように小さな犬の前にしゃがみこんだ。小さな犬の身体に積もった雪を払い落とし、顎をつつく。

小さな犬はぼんやりとした目で、女の子を見上げた。

「良かった」

女の子は口から白い息を吐き出した。

「やっぱり変な犬だよ。こんなに寒くて雪まで降ってるのに、どうしてこんなところにいるの？」

小さな犬はくうんとかすれた声で鳴いた。

「今日は餌持ってきてないんだ。ごめんね」

女の子はうつむく。

「何ていうか、あんたにこんなこと言うのは変だけど……私、勝手な女だよ。ホントに、ごめんね」

もう一度ごめんね、と呟いて、女の子は泣き出した。

小さな犬はゆつくりと起き上がり、一歩、女の子へと近づいた。

女の子は泣き腫らした顔を上げる。小さな犬は何かするわけでもなく、女の子の足に身を寄せていた。

女の子は笑みを浮かべ、訊ねた。

「家、来る？」

小さな犬の小さな黒い目が、女の子の顔を映していた。

「来ないよね」

女の子は立ち上がり、コートの裾で涙を拭いた。

「じゃあ、またね」

女の子は道の向こうへと歩いて行った。小さな犬は小さな目を閉じ、再びその場にうずくまった。

それからしばらくして、小さな犬はとある家の飼い犬となった。

小さな犬があそこにいたときから餌を与え続けてくれた老夫婦の家で、一軒家の庭には小さな犬に合わせた小さな犬小屋があった。小さな犬はその犬小屋の中で眠り、毎朝散歩をしてもらい、散歩の後と夕方には餌を貰った。小さな犬は餓えることも、雨に濡れることも、毛並みが乱れることもなくなった。

その後、小さな犬があの子と出会うことはなかった。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2504j/>

小さな犬

2010年10月8日15時44分発行